「はざまで輝く芸術」の軌跡

上村豊の作品「Raindrops_Polka Dots」（2011年）

上村豊展

展評

平岡昌也

宮城島のサトウキビ畑が広がる桃原集落内にひっそりとたたずむ、モスグリーンのアートギャラリー・Sugarcane Room gallery+cafe（元桃原製糖工場跡）で「上村豊展」が開催されている。1965年名古屋市に生まれ、東京芸術大学大学院美術研究科博士課程へと進み、助手や非常勤講師を経て2006年に琉球大学へ赴任。沖縄で美術教育に尽力する傍ら、前島アートセンターの理事を務めるなど沖縄のアートシーンへ多大なる貢献をされた故上村豊氏（病のため2020年に54歳の若さで急逝）の遺作展である。

美術館さながらのスケールの大きなホワイトキューブに、軽やかでありながらも凛とした美しい筆致で描かれた143点の膨大なドローイングが所狭しと並ぶ。作家の主となる表現手法がインスタレーション（ある特定の空間全体を作品としてみなす手法）であったこともあり、現存するドローイング（アイデアスケッチや考察の記録）による展覧会となっている。

樹木を丸ごと石こうでかたどりする「幽霊シリーズ」（1991-92年）は突き抜けた創造力に、空虚の充溢について熟考を重ねた「吾妻公園温室プロジェクト 内的空間における再配置の試み」（97年）は豊かな感性に、地と図の関係を反転させた「庭に水を遣る ドローイングとフロッタージュによる展示」（2005年）は卓越した審美眼に、もはや絵を描かず穴あけパンチで制作した「Raindrops_Polka Dots」（11年）はたおやかな遊び心に満ちており、その類いまれなる才能に改めて触れることができた。

実行委員会によって丁寧に計画された本展の展示構成が素晴らしく、90年代から通底する彼特有の鋭いまなざしが明解に示されていた。こちら側とあちら側、モノとモノのはざま、凸と凹など、互い違いや表裏一体となる関係性を分け隔てなく見つめ直し本質に迫るような視点である。生前、上村氏は自身のポートフォリオに「私の求めているのは、例えば翻訳者、2冊の国語辞典を携え、その2カ国語の間に引き裂かれる、翻訳者の身体なのかもしれない。」（一部抜粋）とつづっている。

翻訳者の身体、対のはざまに立った考察。つまり、幽霊シリーズにおける、樹木側にもかたどった石こう側にも立ち現れていないそれらしさ、フロッタージュにおける、写し取ることのできなかったもう一つの真実といったような、実は事物のはざまにあるかもしれない空虚への深い洞察がうかがえる。いまだYesやNoで容易に解決することのできない課題が山積みの現代は、彼の目にどのように映るのだろうか。はざまの真実をどのような手法であぶり出してくれるのだろうか。想像は膨らむ一方である。

本展が一つの区切りとなってしまうのは惜しい。作品に内包された問いに対し、われわれは何を感じ、明日に昇華させていくのか。彼がのこしてくれた「はざまで輝く芸術」への応答は、私たちの胸の中でこれからも続く。

（ARCADE代表）

◇　◇

「上村豊展」は3日まで、うるま市与那城桃原の「Sugarcane Room gallery+cafe」で開催している。開館は正午～午後5時。

沖縄タイムス　2025年8月1日